

## ポンソンビ博士と『英訳弘道館記』

水戸史学会理事

照沼好文

はじめに

幕末、明治初期に來日し、日本の古代文化を研究して海外に紹介した日本学者は英国に最も多く、就中傑出した日本学者としてアーネスト・サトー (1843 ~ 1929)、W・G・アストン (1841 ~ 1911)、B・H・チェンバレン (1850 ~ 1935) 等が挙げられるが、彼らは率先して日本の古典を研究し、翻訳して欧米諸国に伝え、他方わが国の学徒たちにも少なからぬ刺戟を与えた。さらに時代を降れば、源氏物語の翻訳者アーサー・ウェーレー (1889 ~ 1966) や統紀宣命の翻訳者サー・ジョージ・サンソム (1883 ~ 1965)、或いは日本に移住し、日本文化を海外に紹介したラフカディオ・ハーン (1850 ~ 1904) などが挙げられるが、これらの諸先輩の後を承けて、衣食住共に日本人の生活を体得し、日本人の物心両面の生活を味わいながら、日本の歴史、神道、神社に関する研究をとおして、わが皇室の尊厳を知り、皇室に対する尊崇の念を深めたのは他ならぬリチャード・ポンソンビ・フェイン (1878 ~ 1937) である。しかし、現今では日本文化の研究者、或いは神道、神社の研究者の間においてすら、ポンソンビ博士の令名を聞く機会を殆ど逸していると思ふ。

恰も、ことはボンソンビ博士の没後六〇年という歳である。この機会に、本稿ではボンソンビ博士の業績の一端を紹介すると共に、明治聖徳記念学会設立二五周年記念出版(戦前)の『英訳弘道館記』——『The three English versions of the Kodokwanki or Kodokwan Record.』——の成立に関する経緯をとおして、ボンソンビ博士の動向を伝えてみたい。

## 一、日本への関心——家系——

最初に、ボンソンビ博士(以下、ボ博士と略称する。)の略歴を知るために、『本尊美君碑』の撰文を紹介して置きたい。この碑は昭和一四(一九三九)年四月二三日、ボ博士の知人、門下生たちによって、博士が生前、最も愛着をもっていた京都の地の一角、西賀茂西方寺境内に建立され、また、その碑は幕末の勤皇女流歌人蓮月尼の旧棲地、神光院より約一町ばかり西の地に建っている。

英国法学博士本尊美利茶道君、倫敦人系、出名族、以蒲柳質蚤遊海外、其在香港、任総督秘書兼大  
学講師、今上尚在東京、航欧、通其地、侍駕、通訳、以功、贈勳、四等君、已屢次来朝、因慕我国情之美、  
大正八年始住東京、遂徙京都、君通曉国語、校覈国史、足跡殆遍海内、於皇室制度皇陵神社神道之等、  
攷究闡明、尤致其力、多所論著、博覽卓識、学者推之、君恭儉寡欲、清瘦如鶴、平生起居飲食衣服盡由  
我国俗、視門下猶子、終身不娶、昭和十二年十二月十日病没於上賀茂第一享年六十(返点、送り仮名は、照沼附す。)

つぎに、ポ博士の経歴を『本尊美利茶道翁略伝』によつて、敷衍してみると、ポ博士は英国貴族の出身、父ジョン・ヘンリー・ボンソンビ、母フロレンスの嫡子としてわが明治一（一八七八）年一月八日、倫敦イースト・テラスに生まれた。元々、ボンソンビ家は英国における非常な旧家であり、名門であつた。先祖ボンソンがボンソンビの莊園を領したのが、わが治承元年前後、即ち西暦一七七年頃で、今より八百数十年以前、わが国では島津家、毛利家に匹敵するといつてよいといふ。<sup>(4)</sup>その本邸は英国サマーセット州ヨーヴィル町家アリアプトンにあつて、屋敷の広さ六万坪、所有の土地は百二〇万坪にのぼる。本邸の建物はいずれも古く、新しいものでもわが桃山時代に相当し、もつとも古いものに至つては鎌倉時代に溯ると言われる。

こうした古い環境と教養のなかで成長したポ博士は明治二九（一八九六）年、南阿ナタールへ総督秘書として赴任して以来、南米トリニダット（南米ヴェネツエラの東北  
海中にある英領の島）、セイロン等の総督秘書の役を経て、明治三六（一九〇三）年に香港へ総督秘書官として赴任した。これより先、明治三四（一九〇一）年八月には初めて日本を訪問し、実際に日本を見聞している。この時から、ポ博士は日本文化へ強い関心を寄せ始め、三六（一九〇三）年比較的日本人の多い香港への転任を契機として、日本研究と日本語の学習に本格的に着手した。爾来、再三に亘つてわが国に來遊し、わが國風、國情に親しく接近するに及んで、遂にわが國体、國風の讚仰者として、皇室、神道、國体等に関する研究に専念し、それらに関する著述を数多く發表するに至つた。後年、ポ博士は日本に永住するに至つたが、その動機について、博士の無二の親友ベイティ・トマス博士は、こう述べている。<sup>(5)</sup>

（略前）彼を日本に永住せしめた動機は、まさしく彼が此國に、眞の宗教と、理想に対する眞の信仰と、神に対する常住不易の認識とを發見したからに外ならぬ。道聽途説や不可知論に墮した世にあつて、日本における皇室中心思想、及び皇祖に対する普遍的信仰は、磁石（マグネット）の如く彼を引き寄せた。而して彼は英国（略中）に居つて動搖常なき浮世の浪の中で暮すよりも、旧都の御所や古跡を訪ね、其の研究に日を送る方が、一層幸福であつた。日本には、

人が「新」だ或は「旧」だと言ほうと、今猶一個の普遍的な真理が、国内の到る所に認容されて居る。……

このペイティ博士の言葉は日本文化に魅せられ、日本に永住することを決意したポ博士の心情を余すところなく語っていると思う。ペイティ博士自身も、「敵国に殉じた悲劇の法学者」として、悲運な生涯を日本に送ったが、彼もまた日本文化を研究し、なお神道に関する論文を残している。<sup>(6)</sup>

## 二、ポ博士の日本研究

さて、初めに見たように、古い歴史と伝統をもつ英国貴族の家系の中で成長したポ博士の教養は、日本文化に関する研究の基盤として、博士の研究を助けたに違いないが、一方博士が日本文化の研究を志し、日本語の習得を思い立ったのは、英国における日本学者、アストンの英訳『日本書紀』、同じくチェンバレンの英訳『古事記』などを読み、それらのもとになった文献の原書を直接読破したいという願望があったからだという。勿論、こうした博士の願望は、やがて博士が多くの人に紹介する著述を残し、かつ海外に日本文化を紹介するに至った重要な発端となったことは否めないが、この問題は今後の研究に期待しなければならぬ。

また、ポ博士の日本研究における領域を見れば、ポ博士は日本の理解とその文化的意義の発見顕揚のために、日本歴史一般及び皇室制度の研究、神道及び神社の研究、そして日本の教育や日本人の日常生活に関する思索評論等にわたって研究を展開しているが、ポ博士の学問の特質は「その全組織に於いて全き日本学の一体系を形作つてゐるものと断じてよい様に思ふ」と徳重浅吉教授によつて指摘されている。<sup>(8)</sup><sup>(9)</sup>

とくに、『大日本史』の研究から日本学に入ったポ博士の研究には、まず『皇室譜』をはじめ、『京都史』『御陵』『皇室と神道』『神道の盛衰』或いは『賀茂御祖神社御紀』等々枚挙に遑がないが、博士晩年の五、六年は全国の神社

研究に没頭されている。また、これらに対するポ博士の研究態度を見れば、ポ博士は文献学的研究に基盤を置き、あくまで研究に必要な文献、記録類を徹底して蒐集、読破している。とくに、神社研究では個々の神社を一社毎に、完全な個体として研究を実施し、その結果を総合して全体の形を理解しようとしている<sup>(12)</sup>。従って、当該神社に関する文書記録類は勿論、伝説、民間の説話、民間信仰、神殿の建築、鳥居、彫刻、絵馬、灯籠、神域、神領の変遷等について具さに実地調査を行なっている<sup>(13)</sup>。ともかく、ポ博士の研究は全国の官国幣社から、有名な府県郷村無格社に至るまで殆ど実地踏査し、かつ各社において洩れなく参詣蒐印しているというから徹底したものであったが、『京都史』の研究の折には洛中洛外の神社、仏閣、史蹟、名勝等に博士は殆ど隈なく足跡を印したという<sup>(14)</sup>。さらに、高山昇氏は、つぎのようなことを述べられている<sup>(15)</sup>。

又時には意外の質問をも受けて大に困らされ申候中に彼鳥の御研究中の事なりき。老生宮島の巖島神社にも多年奉職いたし居候こと、て、有名な神鳥<sup>ゴカズ</sup>、御山の神鴉<sup>ミセウ</sup>、御鳥喰<sup>オトケヒ</sup>の神事など実地見聞せしこと、又聊か研究せし事ども御話申上げ尚子別れの神事が対岸大野村大頭神社にて毎年執行せられ、親鳥が御鳥喰の事を子鳥に教へ置き、て後、紀州熊野に飛往きて又還らずといふ伝説、また実地談などいたし候処、ポ翁大に興がられその後同社に詣うで、実地検分せられ候筈にて候。……

この鳥についての研究結果を『八咫鳥』<sup>(16)</sup>（英文）として、のちに『ブレチン』誌に掲載している。

このようにして確立されたポ博士の学問のうち、とくに神道観に注目してみれば、博士は神道について、まずそれが寛容性に富むこと、外国のように宗教上の迫害のないこと、そして神道における潔白性、清浄性を尚ぶその所作慣習に注目しているが、日本においては「国家と教会とは同一にして、天皇は最高の祭司であらせられた」ことを強調している<sup>(17)</sup>。

かくて、ポ博士の学問に対する論評を見てゆくと、つぎのような新村出博士の言葉が窺われる<sup>(18)</sup>。

私は翁がその文献考証と実地踏査との両方面から推し進んで、ひたすら帰納的な研究法を以て徐ろに帰結にたどりゆき穩健な英国風な実証学風を示されたことを常に敬重して止まない。神社神祇に関する事項の外、民間信仰に關連する調査を試み、また皇都の沿革、宮殿の変遷、朝儀の故実などについても、或は洋人未踏の地を開拓せんとする概を示した。

そして、加藤玄智博士は宣長、信友、篤胤等の學問とポ博士の學問との對比から、博士の學問の優れた点を稱揚している。<sup>(19)</sup>

日本の神道學者としては平田篤胤翁あり、本居宣長翁あり、さらに伴信友翁もあるが、平田は華やかな筆を以て優り、本居は真面目にして而も尊皇精神の基調に立つた信仰があるのに対し、信友の研究考証には、他の追隨を許さぬ精確緻密な史的考証がある。誠に地味な誠実さがある。是等の三大人に比べると本尊美翁には平田の華やかさはないが、信仰的な性質に於て本居翁に比すべく、其攷証學風に於て、伴信友大人に一脈相通ずる其の真面目さがあると思ふ。此の点で本尊美翁は、外人の神道研究家中、決して他の追隨を許さない第一人者であつたと思ふ。

### 三、『英訳弘道館記』の成立をめぐつて

#### (一)、『英訳館記』について

ポ博士の日本研究は『皇室譜』<sup>(20)</sup>に始まっている。その『皇室譜』をはじめ、「後醍醐天皇と建武中興」<sup>(21)</sup>「長慶天皇」<sup>(22)</sup>「壬申の乱」<sup>(23)</sup>等々の一連の論文はまさに水戸の『大日本史』の歴史觀を承け継いでいる。<sup>(24)</sup>こうしたことから、ポ博士の水戸の學問に対する關心、水戸義、烈二公に対する崇敬の念には格別なものがあつたことは事實である。ポ博士は

昭和九（一九三四）年五月に、義、烈二公を奉斎する『常磐神社誌』<sup>(25)</sup>（英文）を発表し、その後昭和一一（一九三六）年五月に『英訳弘道館記』<sup>(26)</sup>を完成させている（なお、『弘道館記』については本稿三二頁の加藤博士の解説を参照されたい）。

ところで、このポ博士英訳の『館記』を中心に、のちに加藤玄智博士、尾野稔教授らが各自『館記』を英訳した。その結果、以上の『英訳館記』三編を一冊に編集して、昭和一二（一九三七）年一月に明治聖徳記念学会設立二五周年記念出版として、同学会から刊行された。この『英訳館記』の記念出版に関する経緯については、同学会々長林博太郎博士の序文に明らかである。

近頃又英人本会々員ボンソンビ博士、会員立正大学教授尾野稔君及び本会研究所長加藤玄智博士は、各自別々に之を英訳して、弘道館記の英文完訳を他日に玉成する捨石を置かれ、其基礎工事を開始されたといふことを三君から聞いてをる。寔に学究的良心の充溢した美拳である。仍て今弘道館記の原文に、三君苦心の英文翻訳を添へ、以て之を上梓し、本会設立二十五周年記念出版物の一に加はへ、聊か三君の勞に酬いること、した。……以上から、『英訳弘道館記』出版の経緯を窺うことができた。因みに、同書の巻頭には『弘道館記』拓本の写真、会長林博士の序文、館記の原文（漢文）、市村瓊次郎博士校閲・溝口駒造氏起稿の漢文書下し文が、さきの『英訳館記』三編と同時に編集されているが、同書は『英訳館記』の嚆矢として、注目に価する。

## （二）、ポ博士の館記英訳

つぎに、同書の成立をめぐって、ここでポ博士また、加藤博士における館記英訳の作業に焦点を当て、それについてアプローチしてみようと思っているが、これに先立ち、同書の館記英訳の直接の動機を見れば、ポ博士と水戸の有志達との間に端を發し、次いでポ博士と加藤博士との交友関係から、同書の成立をみるに至ったので、初めにポ博士と水戸の有志達との間における交流と館記英訳、そして加藤博士による英訳館記の成立の経緯を辿ってみよう。

既に述べたように、ポ博士は館記を翻訳するより先に、『常磐神社誌』（英文）を執筆している。ポ博士が同書を執筆するに際して、常磐神社宮司小川速氏は『烈公行実』、菊池謙二郎氏の『義公略伝』或いは『迎鑿誌』（昭和天皇の水戸行幸記念誌）等の文献その他の資料を博士のもとに届けている。これらの資料をもとに『常磐神社誌』を執筆して、博士は昭和九（一九三四）年五月に英文機関紙『トラベル・ブレチン』にこれを発表した。この時、ポ博士は小川氏宛書簡と共に、同書を神社に贈って五月十二日の神社例祭当日には、これを社前に奉納するように依頼している。この折の小川氏宛ポ博士の書簡には、

本日、御親切なる甚だ面白御芳墨拝見任り御多忙にも不拘、御長文にて貴社之御事を御下教賜、千万難有奉存、誠に深謝仕候。今回認め候英文の論文は極めて簡単なる拾頁程之恥しきものに有之候得共、御例祭の御月出版致候。上一部謹而奉納仕度奉存候。

と記されている。

これまでも、ポ博士は水戸出身の秘書兼助手の檜山謙氏をとおして、水戸の有志達との交流があったので、再三水戸を訪問している。例えば、当時水戸中学教諭であつた天海謙氏宛のポ博士の書簡（28）を見れば、

どうか、どうか水戸へ参拝拝眉之光栄を得度と奉存候。実に明治末、大正始に度々貴市に参候事有之候得共、

（いずれ）何 其内是非義公様之御都市を亦拝観致度候。……

と、水戸に対する憧憬と、義公への敬慕の念を披瀝しているが、昭和九（一九三四）年五月は恰も大楠公六百年祭の歳に当り、この機会に天海氏自身が訳註した楠公賛、先哲の大楠公に関する詩歌文集、さらにポ博士が鹿島神宮に参詣すると聞いて、藤田東湖の拝鹿島祠の古詩長篇を同時に、天海氏は博士に贈った。この時に、博士は

陳者、本日大楠公之御事を記載致候知道五月号難有拝受仕候。実に義公様と正成卿とは、日本之真之御愛国者に

被為居候間、我々現代之ものに潔白なる鏡に御座候。

と感想を述べている。

これより先、常磐神社研究の資料を贈呈した時、天海氏<sup>(30)</sup>は、

余は厚顔にも、竊に謂ひけらく、常磐神社を海外に照会<sup>(31)</sup>する以上、同じく博士を煩して、弘道館記を英訳し、以て水戸学精神を海外に宣揚弘通<sup>(32)</sup>するを得ば、如何あらん。

と、常磐神社宮司小川氏に謀り同氏の賛同を得て、ポ博士の快語を得たという。実に、この時がポ博士の館記英訳の契機であった。

丁度、昭和八（一九三三）年一二月中旬、ポ博士は避寒行のため香港に向う船中で、館記英訳を試み、翌九（一九三四）年三月四日帰洛の上、水戸の天海氏にこの英訳一部を届けたが、これ以前、二月中旬頃に、檜山氏は「先生も一度英訳致して見ましたが、唯単語の羅列に過ぎず、館記の精神を現す事不可能なりと申して一度放棄致しまして、先生からの御訳文を御待ちして居る次第<sup>(31)</sup>」である旨を、天海氏に伝えている。しかし、この頃のポ博士の健康状態は勝れず、尾野教授の館記英訳の後記にも、博士の健康状態が思わしくないので、「先生自身の研究活動も中止」の状況であったと述べている。そして、ポ博士自身は、

弘道館記の翻訳者は、日本の歴史また中国の古典に通ずるだけでなく、水戸藩の学者たちによる特別な解釈に精通することが必要である。この点で、不幸にも私はこれらの条件を備えていない。……それはただ弘道館記を英訳するに過ぎず、水戸黄門（斉昭）の内面的思想を訳出しているとは申せない。<sup>(32)</sup>……と述懐している。

いずれにせよ、ポ博士の英訳館記は水戸に届けられたが、昭和九（一九三四）年三月二五日付の檜山謙氏から天海

氏宛書簡には、<sup>(33)</sup>

先日御送り申上候英訳は時間無之先生より御送り被下候和訳と対照する事の出来ざりしは甚だ残念に御座候。航海中に何の参考も無之して英訳仕候ものに御座候間誠に不出来のまゝ、に有之候間、何卒御容赦被下度しとの事に御座候。……

と見える。

こうしたことから、加藤博士はポ博士の英訳館記を原案として、その確定訳を作成する構想であったが、加藤博士には思うところがあつて、改めて博士独自の英訳の作業を進め、同時にポ博士の愛弟子星野教授も館記英訳を試みた。<sup>(34)</sup>この時、加藤博士に館記英訳を依頼し、その交渉の労を取ったのが、当時彰考館司書であつた福田耕二郎氏であつた。

### (三)、加藤博士の館記英訳

さて、ポ博士と加藤博士との出会いは大正七（一九一九）年頃から始まるが、大正八（一九二〇）年にポ博士が日本に來住され、その後加藤博士との交流は一層深まっている。爾來明治聖徳記念学会の終身会員となり、ポ博士は同学会紀要に多数の論文を發表している。ポ博士の『君と臣』は同学会の例会の席上で講演し、のちに刊行された。また、同書は杉浦重剛翁の『倫理御進講草案』にも収録されているので、昭和天皇（当時皇太子殿下）の天聴にも達せられている。その他、同紀要に「昭和御大典印象記」をはじめ、「官幣社と御祭神」「大倭神社」「丹生川上神社」「八十島」、そして「鹿島大神と香取大神」等々の学術的な論文を發表している。因みに、ポ博士の『神道の盛衰』の序文に、加藤博士はこの『神道の盛衰』の論文が従来国内で發表されなかつた理由は、「博士の当論文が最も強力に、神道は宗教である、否、<sup>(35)</sup>非常な活力をもつ生きた宗教であることを公然と断言するために執筆されたためである。また、私の神道は宗教であるという立場はポ博士のそれとは（即ち、私の立場は比較宗教学であるので、この点で）非常に

相違している。しかし、私たち（ポ博士と私）は神道が一種の宗教であるという点では同じ結論に到達した」（照沼訳）と、ポ博士の日本研究の一端を紹介し、かつ両者における神道研究の出発点の相違に触れているのが注目される。つぎに、加藤博士の館記英訳について見てゆくと、昭和一一（一九三六）年五月七日付、博士より福田氏宛書簡<sup>(37)</sup>に、つぎのように記されている。

拝啓 弘道館記の英訳ハ決して容易の業に非ず。仍て加筆して御回送申上候。新加筆の場所ニハ青鉛筆ニて——を欄外ニ引キ置候。然レバ雨谷氏へ既ニ回送され候「タイプ」のその部分を責下ニてそれを御加筆御訂正、其上それを矢張雨谷氏へ御返しなされ、今回御回送申上候同封の「タイプ」は貴下自身必ず御保存被下度候。さすレバ新訂正のものが水戸ニ二部あることニなり、心強く被感候ニ付、左様願上候。草々

この書簡と一諸に、ほぼ確定訳に近い英文タイプの館記が福田氏の手元に届けられている。因みに、この英文タイプの館記と、『英訳弘道館記』中の加藤博士による現行の館記英訳とを対比してみると、博士が青鉛筆をもって指摘した八カ所の訂正箇所には、殆ど文章の訂正補足などはなく、ただ前置詞、接続詞等の訂正程度であるので、これはほぼ確定の館記英訳であると推察される。

また、これより先に、加藤博士の試訳『英文弘道館記』<sup>(38)</sup>が福田氏のもとに届けられている。この試訳の冒頭に、加藤博士は「弘道」の意味について、つぎのように解説している。

弘道館記は水戸学思想の精髓を具体的に表現して、これを碑に刻んだ銘文である。館記は天保九（一八三三）年の藩校弘道館設立に際し、日本の文学、歴史研究の奨励者、水戸九代藩主徳川斉昭によって起草されている。『論語』の「子曰人能弘道非道弘人」という言葉はこの館名に示唆を与えている。ここで、これについて簡単な説明をして置くことが適切であろう。中国の伝説的皇帝の堯舜時代における社会は理想的であり、人道は完全な

ものが行われていた。父子・長幼・夫婦・朋友の間における関係は当然あるべき姿にあった。しかし、次の時代には頽廢が始まり、かつ前代の秩序を修理回復することが賢人君子の仕事になった。さきの「人能弘道云々」の語句を適切な例で説明すれば、映りうつが悪くなり、磨研を必要とする鏡の姿に例えることができる。人間は鏡を研くことは可能である。他方、鏡は無活動の状態であるので、人間を研くことはできない。この理念が上記の孔子の言葉の基本になっている。「弘道」は鏡を研くこと、人と人との関係を一層完全なものにすること、人間社会を一層整然と作り、かつよく統制がとれたものにする事等の意味がある。この目的は粘強い、かつ忠実な学習によつて、また礼儀を重じ、道徳を守る行為によつて達せられる。……(照沼訳)

以上の解説の最後に、博士は水戸の学問について「換言すれば、水戸学の教義は、弘道館記を慎重に読破することにより明らかのように、神道と儒教との融合である」と結んでいる。

ここで、『英訳館記』中の加藤博士による現行の英文と試訳とを対比してみると、両者の間における訂正箇所は一八カ所に及んでいる。とくに英文の語句には、両者の間に殆ど変化が見られないが、言葉の省略、語順の入替等に、多少の変化が目される。しかし、大筋で両者には大きな変化は見られず、ただ現行の訳文が試訳より整理された内容であるといった印象である(現行の英訳館記と試訳の英文との対比表は紙数の関係上、省略した)。

次いで、昭和一一(一九三六)年九月一二日付、加藤博士より福田氏宛端書(39)に、

拝啓 明治聖徳会の紀要九月号ニハ、ボンソソビ及加藤の弘道館英訳改訂文掲載被致候。別刷御希望なら、折返(大至急) 御一報願上候。尚その他ニはその中一度拝顔得度と存じ居候。 不一

と、紀要九月号に、ボ博士並びに加藤博士の館記英訳の改訂文が掲載された旨が報ぜられている。さらに、昭和一

二（一九三七）年七月五日付、博士より福田氏宛端書に、

拝啓 十月発行の紀要（48）ニハ、立正大学教授尾野雅道氏の弘道館英訳が出来ます。別刷御入用なら、至急御申  
込ミ被下度候。

と、尾野教授の館記英訳の掲載を伝えている。

結局、昭和八（一九三三）年頃に、ポ博士によって着手された館記英訳は加藤博士に引き継がれ、同時に尾野教授によっても翻訳されたが、これら三篇の館記英訳は一本に編集され、昭和一二（一九三七）年十一月二日に、明治聖徳記念学会設立二五周年記念出版として、同学会から刊行された。だが、この頃（十一月四日）から、ポ博士の胃病は急激に悪化し、一月の下旬ごろには大苦悶吐血、胃潰瘍の診断を受け、絶対安静を宣告された。ポ博士は、一月に入り益々衰弱が加わり、さきの『英訳館記』の刊行一ヵ月後の同月一〇日午前八時、多数の門下生、知人、側近者等に見守られて、不帰の人となった。ポ博士の告別式当日の同時刻に、在京の岸秀次氏は自宅において、博士の霊前に供物を捧げ、英訳館記を読み上げて博士の霊を慰めたという。<sup>(43)</sup>翌一三（一九三八）年一月三〇日、東京（神田学士会館）において、明治聖徳記念学会主催による博士の追悼記念講演が催された。<sup>(42)</sup>

#### まとめ

ポ博士は大正八（一九一九）年八月、初めて東京に住居を定めて、日本永住の決心をされてからは、「英国は訪問するので、帰国ではない。日本へは帰朝するので、来朝ではない」と常に言われ、京都へ居を移されてからは、「帰洛する」という言葉を用いられたそうである。<sup>(43)</sup>これはポ博士がいかに日本に愛着を感じていたかを物語る証左である。

また、佐藤芳二郎氏は、

先生は愛国者であつたと同時に、心からなる尊皇家でもありません。皇室に対するその真摯さには敬服を禁じ得ませぬ。かの昭和御大典の際、先生は特に許されて、建礼門前列立拝観の恩榮に浴したのですが、聖駕東都還幸の砌、京都御所御苑内で鹵簿通御のとき、下駄を脱ぎ、額を大地にすりつけて、即ち文字通り土下座をして奉拝されたのでした。

と、博士の皇室に対する尊崇の念は、日本人でさえ到底及ばないものがあつたことを伝えている。<sup>(44)</sup> 田崎仁義博士はポ博士を称して、「碧い眼の高山彦九郎」と呼んだのも、<sup>(45)</sup> こうしたことからであつたが、博士の行動の背景には日本に対する強い畏敬と尊敬があつた。

或国の偉大さと云うものはその国の面積で決められるものでは無くて、その国が世界に及ぼす影響やその国の過去の伝統によつて決まるものである。……日本は明らかに偉大な国である。先頃その即位の大札を執り行わせられた現在の日本の統治者は第百二四代の天皇<sup>(46)</sup>に在らせられるが、世界の中にこの半分の古さでも有ると自称し得る国が在るかどうか疑わしいものだ。だから日本の君主の即位式には畏敬の念や尊崇の情を起させずには置かない様なものが盡く含まれて居る。即ち偉大なる国民・建国の古い帝国・偉大なる伝統・連綿二五〇〇年の古えにさか登る皇朝等が有るからである。<sup>(46)</sup>

かくてポ博士の高潔な人格は各界の多数の人びとによつて景仰された。博士が没した翌年に編集された『本尊美翁追憶録』には門弟、知人等六八名の追憶文が収録されているが、どの文章も敬慕追念の情で満たされている。こうした中で、ポ博士の人と為りを理解し、よき助言者であつた加藤玄智博士は、ポ博士の『著作選集』の序文に、自作の漢詩とその英訳詩五篇を掲げている。これらには、ポ博士の高潔な人格を讃美して止まない加藤博士の心情が披瀝されている。つぎに、その五篇のうちから、一篇を掲げ紹介してみたい。

高士東西鑑

古今稀有倫

敢然無畏行

信愛至誠人

In East and in West,

Rare to see such a noble man!

In past and present,

With love and sincerity.

また、さきの『追憶録』中に、多くの人びとはポ博士の有りし日の温容を髣髴と回想して、それを物語っているが、新村出博士はポ博士との永訣を、こう記している。

永訣は、十月二十七日京都大学の尊攘堂祭典の時であった。最も鮮かに残存してゐるのは、その朝の翁が吉田（松本）品川（孫郎）両先生のみたまに玉ぐしを捧げられた敬虔な容姿であった。

即ち、この敬虔なポ博士の容姿こそ、真に日本の心に昇華された博士の姿であつたと思う。ポ博士没後六〇年のと  
しに当り、その敬虔な姿がいま、静かに眼前に蘇ってくるのを覚える。

- (1) Richard Arthur Brabazon Ponsoby Fane (1878 ~ 1937)。ポンソンビ博士は常々「私の名前はリチャード・ポンソンビーでもなければポンソンビーでもありません。カナ文字の場合にはリチャードポンソンビ又はポンソンビであります」と言っていたが、「京都へ移ってから、二、三ヶ月の間はポンソンビリチャードといふ住所判を用いましたが、片仮名を嫌ったポンソンビ先生は間もなく、それを本尊美利茶道に換へました。カナ文字で書かねばならなかったのは、(役所では外国人はカナ書きでなければ受付けませんでしたので、)公用の時だけでした。その時はポンソンビリチャードと書き
- 本尊美利茶道 の実印を押しました。(昭・五四・一〇・五付、昭沼宛佐藤芳二郎氏書簡)
- (2) 撰文 京大名譽教授文字學博士 鈴木虎雄、書 旧制京都府立京都中学校々々長 山本安之助。
- (3) 『本尊美翁追憶録』 (本尊美翁追憶録編輯行會 昭和二年九月一〇日發行) 所収。
- (4) 平泉澄博士の「ポンソンビー博士」(「日本」一昭・三五・一〇月号) に拠る。
- (5) 前掲『追憶録』所収「Dr. Richard Ponsoby Fane」の邦文訳に拠る。
- (6) 『Thomas Bay (1869 ~ 1954)。昭和三九年一月のベイティ博士の十年祭における高野藤吉氏(当時、外務大臣官房長)の「祭詞」に拠れば、博士は「大正五年来日以來三十有七年にわたって歴代外務大臣の諮問に応じ、真摯黙々として公平妥当な献言を続け……特にパリ講和會議、満州事變、國際連盟脱退、太平洋戰爭開戦、当時など複雑多難な外交の舞台裏にあつて、献身的努力を傾倒せられ、我が外交史上に顯著な事績をのこされ」と(外務省百年史編輯委員會編『外務省の百年』下巻)。しかし、一九四一年博士の母国英国と日本とが戦争状態に入り、本国への忠誠を誓つて外務省を辞し日本政府への協力を断つたが、戦時中も帰国せず、その仮日本に留まり、日光中禪寺湖畔で過(1)した。終戦後はしばらく湘南地方に居住したが、一九五四年二月九日、八五歳の誕生日の翌日死去。葬儀は外務省として東京芝のアンドリュース教会で挙行された。その際、英国側の列席者は無かつたといふ(武内博編著『米』日西洋人名事典)。
- (7) 前掲『追憶録』所収、三原繁吉氏の「本尊美利茶道氏と私」、二四八頁。
- (8) 前掲『追憶録』所収、徳重浅吉教授の「本尊美氏の学問について」、二〇一頁。
- (9) 前掲同、二〇三頁。
- (10) 拙稿「ポンソンビ博士と水戸史学」(「水戸史学」第二二号所収)。

- (11) 因みに「本尊美博士著作選集」(英文)を見れば、つぎのようである。
- Vol. I. Studies in Shinto and Shrines.  
 Vol. II. Kyoto, the old capital of Japan (794 ~ 1869).  
 Vol. III. The Imperial House of Japan.  
 Vol. IV. Sovereign and Subject.  
 Vol. V. The Vicitudes of Shinto.  
 Vol. VI. Visiting famous Shrines in Japan.
- (12) — (13) 前掲徳重氏論文、一九九頁。
- (14) 前掲『追憶録』所収、佐藤芳二郎氏の「先生の日常生活の回顧」、一五一頁。
- (15) 前掲『追憶録』所収、高山昇氏書簡、一八四頁。
- (16) "Studies in Shinto and Shrines." Vol. I. 所収。
- (17) 前掲徳重氏論文、一〇二頁。
- (18) 前掲『追憶録』所収、新村出博士の「ボンスンビ翁を憶ふ」、一六八頁。『本尊美博士著作選集』(英文)第一卷序文。
- (19) 前掲『追憶録』所収、加藤玄智博士の『本尊美翁の日本研究と其人格』、一三四頁。
- (20) "The Imperial Family of Japan," printed at the Kobe Chronicle Press, 1915. なお、『著作選集』(英文)第三卷。
- (21) 日本協会々報第三二一巻。  
(DRAKON)
- (22) 右 第二五巻。  
(DRAKON)
- (23) 右 同 第二八巻。
- (24) 拙稿「ボンスンビ博士と水戸史学」(『水戸史学』第二二号所収)。
- (25) "The Travel Bulletin," No.107, May, 1934.
- (26) 『著作選集』(英文)第四卷所収。
- (27) 前掲『追憶録』所収「本尊美翁との旧交を偲びて」、一〇七頁。
- (28) 前掲『追憶録』所収「本尊美利茶道博士の思出」、八三頁。

- (29) 右同。
- (30) 右同、八四頁。
- (31) 右同。
- (32) ポ博士の館記訳後の言葉、照沼訳。
- (33) 前掲『追憶録』所収「本尊美利茶道博士の思出」、八四頁。
- (34) 前掲『追憶録』所収「本尊美翁の日本研究と其人格」、一三二頁。なお、『追憶録』の題簽は加藤博士の揮毫によった。
- (35) 前掲『追憶録』所収「本尊美翁の日本研究と其人格」、一三二頁。なお、『追憶録』の題簽は加藤博士の揮毫によった。
- (36) 『著作選集』第五卷所収。
- (37) 福田氏蔵。
- (38) "A TENTATIVE TRANSLATION OF THE KODOKWANKI" (福田氏蔵。)
- (39) 右同。
- (40) 右同。
- (41) 前掲『追憶録』、八八頁。
- (42) 『本尊美博士年譜』に拠る。
- (43) 前掲『追憶録』所収、大谷登氏の「本尊美翁を憶ふ」、一二二頁。
- (44) 前掲『追憶録』所収、佐藤氏の「先生の日常生活を顧みて」、一六一頁。
- (45) 佐藤氏の『ボンソンビ博士略伝』、三〇頁。
- (46) ポ博士の『昭和御大典印象記』、四四頁〜四五頁。佐藤芳二郎氏の邦訳に拠る。